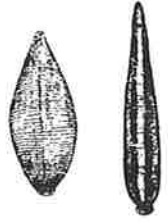


財団だより

多摩川

1982. 9. 第15号

汚れた水域にすむヒルの仲間
(左)バビロビル、(右)シマイシビル

台風10号による洪水(8月2日二子兵庫島)

■多摩の地名■

⑦ 多摩の語源

今までいくつかの多摩の語源についての異説を調べてみたのである。これらは多摩川という川の名前が先にある、それが、多摩郡という地域をさす地名に広がっていったという主張であった。

ただここで一応考えておきたいことは、多摩川は、今は上流から下流まで多摩川に統一されているが、江戸時代まではそうではなかったのである。文政8年(1825)に刊行された仲田惟善の『東都近郊図』には「多摩郡羽村辺迄ヲ多波川ト唱夫ヨリ下玉川ト云」とあるという(山口恵一郎『地名を考える』118頁)。そして下って元の荏原郡に入って六郷川となって羽田鼻で東京湾に入るのである。とくに下流は平安時代には石瀬川とよばれたことが『類聚三代格』の承和二年(835)の太政官符でわかる。すなわち、それに、「武蔵国石瀬河三艘。元一艘。今加二艘」と見えるのであって、この石瀬河が多摩川の下流と推定されているのである。

つまり古代から現代までずっと多摩川とよばれてい

たのはその中流であったということである。

次にユニークな発想に「多摩」は「田間」ではないかという説がある。この説は「多摩川」とは関係なく「タマ」という言葉に着目する。古語には場所とか地形を示すバ(場)の転じたマで終る言葉が多い。ヤマ(山)、ハマ(浜)、シマ(島)などがあるし、タマは(田の間)で水田のことであろうという。水田が広がっていたからタマ(田間)といったのではないかというのである(樽国男氏ほか)。

律令制によって、奈良時代の終りには武蔵の国には二十一の郡が設けられたと考えられるが、「二十一郡のなかには場所や地形を示すマ(間)が語尾についているもの七郡、うち水田地をよぶタマ(田間)が三郡(多摩・埼玉・児玉)ある」(『多摩の五千年』平凡社刊、86頁)という。

(次回つづく)

(多摩の地名・保坂芳春・1979・武蔵郷土史刊行会)

多摩川散歩

●秋川の今昔



郷土史家 石井 道郎

東京都西多摩郡は北の多摩川流域、南の秋川流域に二分され、この両地域はよく兄弟分に見立てられるが、弟分の秋川溪谷は谷幅も狭く、人口、経済力ともに劣勢である。しかし自然の景観は小ぶりなだけにより箱庭的といえよう。歴史の古さは似たようなものだが、それぞれの特異性をもつ。

例えば両地区とも禅宗寺院が多いが、多摩川筋の曹洞宗に対し秋川筋は臨済宗ばかりである。五日市町小和田の臨済宗広徳寺は境内が東京都の史跡に指定された名刹だが、江戸時代の朱印高40石の大寺でもある。実は広徳寺は後北條氏ゆかりの寺で今でも本堂の棟に三鱗の北条家紋をかかっている。青梅の三田氏が北條氏に果敢な抵抗を試みたのに、秋川谷の土侍たちは強いものにはまかれろと時の流れに身をまかせたものとみえる。

五日市町小庄の阿伎留神社は延喜式神名帳多摩八座の筆頭にあげられた古社で、江戸時代は秋川谷はもちろん氷川小河内辺の社まで統括した有力神社であった。アキルとは耳なれない言葉でしばしば語源談議の対象になっている。最近では新羅系女神アカル姫に関係ありという説が有力である。アキルは古代の秋留郷から近代の東秋留、西秋留

という地名となり、おそらく秋川命名の根拠にもなっていると思われる。秋川流域には岸、木住野という姓が多いが、これは新羅の官名である。

遠い古代のある時期に、当地方が新羅系渡来人の集団移住地であった可能性はきわめて高い。

江戸時代に入ると当地は木材や木炭を特産物として江戸に出荷した。これらは秋川の筏になり、その上荷になりして、多摩川本流を経て六郷に運ばれた。その数量は幕末期間2000枚に達し、上荷の炭も数万俵に及んだという。筏の運行は大正末期五日市鉄道の開通まで続いたが、その間の秋川はこの谷の住民を支えた命綱であったわけだ。

さて昔話はそのくらいにして、秋川谷の今日的状況をみよう。今の秋川は北の多摩川と同様、東京都民の憩いの場で、日帰りマイカー族の行楽地となっている。奥多摩有料道路開設後はその傾向がますます顕著で、観光が五日市町のメインの産業となった。また秋川の源流域である桧原村にも民宿が続出している。こうした観光につづく第二の地場産業は山を砕く採石業である。

最後に私のつたない詩をもって現況報告にかえよう。

詩『秋川』

じゃかごの河童に
自動車族が空カンを投げつけた
彼らは あきがわをアキカワと呼び
土手をむしり 川底をさらう
すでにかじかはなく ぎばち、ことうは絶滅し
まんじゅしゃげも残り少い
ああ つくしと針葉樹の似合う秋川
夕靄の梵鐘に涙ぐむ秋川
季節の髪にかざす 柿の実、うるしの紅葉
そのおぼこな娘が 今は
おお なんとしたこと
自動車の若者といい仲！

多摩川と私



増水時の多摩川(京王相模原線鉄橋下附近)
 国学院大学文学部講師 田村 勝正

- 多摩川の砂にたんぽぽ咲くころは われにもおもふひとのあれかし
- 行くべくばみちのくの山甲斐の山 それもしかあれ今日は多摩川
- 多摩川の浅き流れに石なげて 遊べば濡るわが袂たもとかな

これらの短歌は、明治44年に刊行された若山牧水の第4歌集『路上』に収められているものです。恋愛と旅と酒を歌い、生涯を旅のよろこびと悲しみに生きた牧水は、旅の歌のほかに恋の歌、酒の歌など多くの秀歌を残し、万人に親しまれています。生前に刊行された歌集だけでも14冊にのぼりますが、中でもこの『路上』には、20代前半の恋愛とその破綻からの悲愁にみちた歌が多くみられます。

牧水は、若いころは海の旅を愛し、中年からは山の旅を愛し、生涯を通してかわりなく愛したのは溪谷をたずねる旅であったと言われています。たしかに、日向国は尾鈴山麓の坪谷川の峡谷に生を承けた彼にとって、母なる川への意識が絶えずその根底にあったのでしょう。それが上京後の多感な青春期の苦悩の中で、ここにあげたような作品を生む背景となっているように思えるのです。

多摩川のほとりまで歩いて10分足らずの吾家からの道すがら、また四季折々に移ろいゆく多摩川を眺めながらの堤防散策の折に、私はこの牧水

の歌を口ずさむのです。殊に私が愛唱するのは三首目の歌ですが、傷心の牧水が、流れに小石を投げて遊んだのはどの辺であったろうと想像するのも、また楽しいものです。河原での遊びは、直接に川と親しむ最高のものでしょう。

また時には、晴天の日を選んで、多摩の横山を眺めながら、堤防上のサイクリングロードを走ることもあります。私の住んでいる調布市域に相当する部分は未整備のままですが、上流に向くと府中市やその対岸の稲城市などでは、素晴らしく整備された快適な道が続いて居り、疲れを忘れず。是政橋を渡って兩岸を周回したり、時によっては日野橋のあたりまで一気に足を延ばし、帰路の爽快感を満喫します。

早朝、夕方などに決ってジョギングに励む若者の方々も数多く見受けられますし、川面からの涼風は健康を運んで呉れるかのように、肌に心地良く感ぜられます。それにつけていつも思うことは、この堤防に並木が欲しいということです。狛江の松林など、かつての名残りを留めるものが僅かに散見されますが、ほんの数える程であったり、流路の変更で川と離れているものなど淋しい限りです。川の浄化と共に、百年の大計による植樹を願わずにはられません。樹種と堤防の強度との関係など、専門的なことはわかりませんが、関係機関に是非検討をお願いしたいと思います。そうして多摩川の清流と、豊かな緑の空間を次の世代に残すべく努めたいと思うのです。

私は勤務先の学校で「歴史と文学探訪の会」というクラブの顧問を長くやって居ります。石川達三著『日蔭の村』という文庫本をテキストにして、小河内ダムを訪ねたこともあります。また『檜原村紀聞』（瓜生卓造著）を道案内に、秋川をさかのぼって数馬の探訪も試みました。いつの日か、多くの先人の足跡を辿って、多摩川をめぐる歴史と文学の探訪をまとめたいと念願しています。博雅の御教示を頂けると大変有難く存じます。

よみがえ

甦れ！多摩川

●台風10号の洪水

8月1日、台風10号が伴った雨雲は、関東地域にひさかたぶりの豪雨をもたらした。多摩川の水源地域にも、1日の夜中から2日の朝にかけて約340ミリの雨が降った。これ程の量の降雨は、昭和49年9月、狛江の災害をもたらした台風以来の事で、多摩川は、大增水となった。

多摩川の川幅は、広い所で500mにもなる。この川幅いっぱいには濁流が広がることはめったにない。今回も8年ぶりのことである。そして、この8年ぶりの洪水は、幸いに、堤内地に大きな被害を与える事はなかったが、河川敷内の施設には大きな被害を与えている。周知のように、多摩川の河川敷内には、公共団体や企業、法人の施設が数多く造られている。これらの施設の多くは、運動場や公園が主であるが、中・下流部の市、区の施設のほとんどが、表土の流出、多量のゴミ、土砂の堆積によって使用不能となっている。概算ではあるが、沿岸、11の市区で調査した所によると、約6億円の被害をうけている。これに、各種法人、企業、個人の被害をあわせると、その倍以上になる事は想像にかたくない。各所とも、その復旧対策に頭をいためているようだが、`担当者の弁によると、復旧は、この秋の台風期以降にやらなければならないという。つまり、復旧しても、また少し大型の台風がくれば、同じ状況になるからである。

河川管理者による治水対策は、洪水確率何年といった予測のもとにその工事が進められる。しかし、この根拠は、今日のように天候異変が続く状況では、たいしてあてにならない。又、多摩川が

かって暴れ川だと呼ばれていた事からすると、今回程度の洪水は日常の事だったのかもしれないし、むしろ、近年の多摩川がおとなしすぎたような気さえする。

私達は、川という概念をかなり狭く解釈するようになったようだ。日本のような地形の国土では、平地は全て川の氾濫原と考えてもさしつかえない。つまり、ひとたび洪水になればどこもが川の流路になりうるということである。先の長崎の水害を見れば良く理解できる事で、一瞬にして道路が川に変貌したのもそのあらわれである。

今回の多摩川の洪水は、特に集中的で、記録的な降雨があったわけではない。多摩川がすこし増水したといった方が妥当かもしれない。そして、堤防の範囲で洪水が治まったと見るべきだろう。ところが、下流部の各地で床下浸水がみられたように、堤防の中の市街地は破堤でもしようものならひとたまりもない所がかなりある。この事から考えると、私達は川の範囲をもう少し広義に捉える見識を持ちあわせておくべきではあるまいか。そして、その対策についても……。つまり、川の氾濫原は依然広域にわたって存在するという事であり、記録的な洪水の可能性は明日にでもありうるという事だ。そのためには、氾濫原の土地利用なり、水源林の保全といった目に見えない川の対策を万全にしておく事が水害をより少なくする知恵でもある。水害をなくす対策はないという事を認識しておくべきであろう。

急 告

この8月初めの台風10号による多摩川の洪水は、8年ぶりの事で河川敷内の環境に大きな変化をもたらしたと考えられます。財団では、この洪水による河川環境の変化を捉えるため、関連する調査、研究の募集を行ないます。

詳しくは、財団事務局へお問い合わせ下さい。

財団の事業紹介

〈研究助成1〉

昭和57年度（第1次選考）研究助成課題が、このほど決定しました。今回決定した研究はA類継続研究10件、A類新規研究6件、B類継続研究4件、B類新規研究6件、合計26件です。新規研究

課題は次のとおりです。

なお、財団は研究助成の応募受付は年中無休で行っております。研究内容が具体的にまとまりましたら財団事務局までお問い合わせ下さい。

| 研 究 課 題 | 代 表 研 究 者 | 所 属 |
|---|-----------|------------------|
| 〈A類研究〉 | | |
| ●石けんへの切替えが多摩川の水質および底質に及ぼす影響の評価 | 須 藤 隆 一 | (社)日本水質汚濁研究協会理事 |
| ●多摩川水系魚類の餌料についての研究——河川敷流水域における稚仔魚の初期餌料についての研究—— | 杉 浦 宏 | 井の頭自然文化園水生生物館館長 |
| ●多摩川流域の都市河川の地下水流出の涵養源に関する同位体水文学的研究 | 松 尾 禎 士 | 東京工業大学理学部教授 |
| ●多摩川に生息する魚類の魚病相と再生産力に関する研究 | 日 比 谷 京 | 日本大学農獣医学部教授 |
| ●流域の集水システムと水質予測方法に関するシステム工学的研究——多摩川流域における流域下水道システムの環境アセスメント—— | 華 山 謙 | 東京工業大学工学部教授 |
| ●多摩川水域における特定物質の汚染とその防止に関する研究 | 小 椋 和 子 | 都立大学理学部助手 |
| 〈B類研究〉 | | |
| ●秋川流域の陸水学的研究——特に秋留台地の地下水と秋川の流量について—— | 角 田 清 美 | 都立武蔵村山東高等学校教諭 |
| ●多摩川に生息するセスジユスリカの年間世代数の算定 | 竹 村 彪 | 川崎市立橋高等学校教諭 |
| ●子供達に科学的な自然認識を得させるために、郷土の多摩川をどう教材化するか——資料収集と授業実践—— | 阿 部 国 広 | 川崎市立住吉小学校教諭 |
| ●多摩川流域におけるギンイチモンジセセリの分布と生態 | 田 中 和 良 | 日本大学豊山学園中学校教諭 |
| ●雑草による多摩川汚水の浄化 | 宇 都 宮 嵩 | 川崎市住民 |
| ●多摩川流域の生物と環境に関する学習の基礎的研究 | 栗 田 敦 子 | 都立教育研究所科学研究部指導主事 |

〈研究助成2〉

助成集報（第6巻）及び多摩川環境調査助成集（第3巻）が完成しました。内容は下記の通りです。

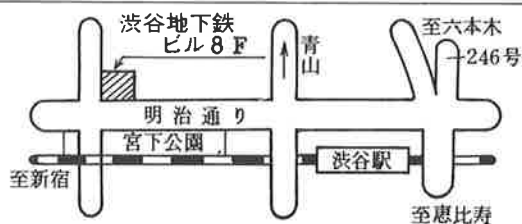
助成集報（第6巻）

| 研 究 課 題 | 代 表 研 究 者 | 所 属 |
|--------------------------------|-----------|-----------------|
| ●多摩川上・中流における水温の実態とその形成機構に関する研究 | 西 沢 利 栄 | 筑波大学地球科学系教授 |
| ●多摩川流域の蝶類保護に関する生態学的研究 | 三 島 次 郎 | 筑波大学生物科学系講師 |
| ●多摩川水質に影響を及ぼす基礎的因子の解析 | 今 岡 正 美 | 山梨大学工学部教授 |
| ●多摩川水系のアメニティ構造解析に関する研究 | 杉 尾 伸太郎 | (株)ブレック研究所代表取締役 |
| ●多摩川流域の大気環境に及ぼす地表面の熱的能力に関する研究 | 会 田 勝 | 横浜国立大学教育学部助教授 |
| ●多摩川中・下流域における有機汚濁質の研究 | 落 合 正 宏 | 東京都立大学理学部助手 |
| ●多摩川河床の付着藻類の毒性 | 落 渡 辺 真利代 | 東京都立衛生研究所 |
| ●野川に関する水収支および水溶存物質の涵養源の研究 | 松 尾 禎 士 | 東京工業大学理学部教授 |
| ●多摩川の魚介類の寄生虫相に関する研究 | 広 瀬 一 美 | 日本大学農獣医学部講師 |
| ●多摩川河川敷の植生の多様性についての研究 | 佐 伯 敏 郎 | 東京大学理学部教授 |

多摩川環境調査助成集（第3巻）

| 研 究 課 題 | 代 表 研 究 者 | 所 属 |
|--|-----------|---------------|
| ●橋梁による多摩川の地域文化の変貌と環境破壊の調査研究 | 石 井 作 平 | たまがわこども文化の会代表 |
| ●多摩川下流域の大腸菌群の月別消長について | 竹 村 彪 | 川崎市立橘高等学校教諭 |
| ●多摩川支流である「野川」に於ける水質等の調査について | 児 玉 公 一 | 調布市立第四中学校教諭 |
| ●多摩川中流域におけるわき水と本流の水質汚濁の検討 | 池 島 厚 子 | 都立武蔵野北高等学校教諭 |
| ●多摩川河川敷をおとずれる人々の住環境と多摩川流域の利用のあり方との関係について | 喜 多 野 薫 | 立花建築環境計画事務所所員 |
| ●多摩川中流・秋留台地の下水処理と環境浄化に関する基礎的研究 | 角 田 清 美 | 都立武蔵村山東高等学校教諭 |

- 発行日 昭和57年9月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)400-9142



*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1
TEL (0488)31-8125